

年表で読む 古平の歴史

《80》

古事記の解説

最も古いのは明治二年のこと
である。

活躍した川崎船

昭和の初め頃までタラ漁に使われていたのは、川崎船とされる和船だった。

航海性に優れ、帆走もでき、

乗組員全員でろ（櫂）を漕ぐこと
が出来るので船足が速く、北海
道の沿岸漁業を代表する漁船で
あり、北洋の荒波の中、サケ・
マス船団の漁船としても活躍し
ていた時期がある。

■ タラ釣り船の遭難

古平のタラ漁船の海難記録で

たものを持ち（むしろ）に包んで本州へ送つていった。外に棒タラ（内臓を取つて干したもの）を製造していた。遭難したのは一九歳から三〇歳の若者だった。

明治三四年二月六日、礼文島ヌマツカを根拠地として武藏堆タラ場へ出漁していた、入船町・船頭幸村惣太郎（25歳）外八人が死亡した。当時、古平かららは三五隻程が出かけて操業

明治二年四月七日、斎藤沿左衛門の川崎船・永福丸が沈没し、斎藤沿ハ外五人が死亡した。

発行古平町史編纂室
古平町文化会館 42-12590
第174号・平成16年3月1日

磯辺松太郎所有の川崎船が操業中に遭難し、息子の萬吉外四人が死亡した。

ハ、漂流者の帰郷旅費、および
その家族の扶助費を補助する
こと

二、遭難した場合に、同業者以外から救助されたときの費用弁済の補助をすること

「……また、タラ釣りや

手縫り網の漁業基地としての古平町では、遭難死亡者には一円

の市場へタラを運んだ帰り、強風のため大謀網に乗り上げて転覆し、大谷久八外（30歳）五人が死亡した。このとき、大谷留藏と本間文吉の二人は帆柱につけまついて救助された。

大正年一月二〇日、入船町
本間銀松の川崎船がタラを満載
し帰港途中に遭難し、本間直次
郡外三人(此上二三人)。

■ 災害の補償と救済

「鮭釣業錦札書換え」現存している鮭漁についての最も古い文書である。(○一 文字不明)

一、金式拾錢 証

但古平郡入船町本間松太郎
鱈釣鑑札 ○以下○之分

右正一請取候也

一
四
四
二

雜稅課徵稅係

大正一一年

▼一二月九日

七時起床、朝食後に美國行きを思ひ立ち出かける。八時半出発、群来村の山の上から海を眺める景色は、實に氣が晴れ晴れするするようなよい景色だ。川崎船から手ぐり船、その他漁船が沢山出漁している。發動機船五、六隻が美國方面に向けて航行している。珍しい程の上ナギだ。アトマイの高橋に寄る。網キユリをやつていた。美國尾本に寄り大謀の掛け金の請求をする。その後、⁽²⁾に寄りいろいろ話をす。②に寄り赤岩大謀を訪ねたが、大漁で六万円余りの水揚げがあつたとかで元気もよい。四時頃帰途につく。ちょうど古平へ行く馬車があつたので乗せてもらつて帰る。

▼一二月一〇日

起床七時、日曜日で子供達が大勢で賑やかだ。天気も快晴で暖気になつた。この頃冬イカが獲れると、今日も沢山売りに来た。カレ網漁はまだ早いが一向に獲れぬ。年末金融はいつそう詰まるだろう。

▼一二月一一日

昨日からの大吹雪は今日も続き、海は大しけだ。この分では漁も出られず年内は不況ならん。

▼一二月一二日

本年の歳末は各地とも不景氣で一段と厳しいようだ。新聞を見れば農村の不況も甚だしいこと。当地としても春の鮯場は不況、海産商は暴落で損大謀は不漁、リンゴは豊作だったが値段暴落のため不況、何ひとつよいことはないので、市中金詰まりのこと。近年稀とのことです。

▼一二月一四日

朝から雪が降る。今日も大豆を煮る。熊さんは浜野こうじ屋のところへ行く。夜、鶴間のところへ話しに行く。雪は昨日からずいぶん積もつた。

▼一二月一七日

朝からチラチラと雪が降り出し寒い。父はまだ味噌作りの方で忙しい。店はボツボツ客がある。二時頃突然佐渡から竹田、中川さんが来られた。佐渡⁽⁴⁾の用件で小樽へ来たのだとのこと。今日の寒さは一段と厳しい。

高野名幸作さんの日記から



【75】

▼一二月一二日

大吹雪、大しけ、昨夜來の大雪は今朝までに積ること一尺余り。熊さんは雪投げに昼頃までかかる。東京坂安へ下半期分一、五〇〇円余り送金した。桑名の山本商店店員が小樽に來たとの電話があり、五千圓余りの約定をした。

▼一二月一三日

いよいよ年末にもなつたので詰まるだろう。

▼一二月一六日

昨日からの大吹雪は今日も続

▼一二月一八日

いよいよ年末にもなつたので詰まるだろう。

▼一二月一九日

午後五時頃から大吹雪になると、一寸先も見えぬ。板戸を打つ音も恐ろしい程だ。⁽⁴⁾の件について中川さん、支店主人と困り相談に行き一〇時帰る。一尺五寸も雪が積りひざまでかくれる程だ。こんな大雪も近年珍しい。

▼一二月二〇日

昨夜來の大雪は実際に近年稀なことだ。今朝もまた雪が降りし

今日から味噌作りの豆を煮るに取りかかる。日下のところ、白米

で、大阪、東京では銀行の取りつけ騒ぎが起きている由。古平でも本年は海産商を始め何商売も大打撃を受け、金融も切迫したこと。われわれの商売はこれでもまだよい方だ。

きり、一尺以上にもなった。熊さんは未明から起きて雪かきをやっている。とても一人ではやれぬので中川兄さんも手伝いをする。正午近くまでかかつてようやく終わる。午後新地方面へ行く。時化でカレ網も出られぬ。漁もダメで不況だ。帰途⁽³⁾に寄り三時過ぎに帰る。夜梅野君と中川さんとで支店の風呂に入りに行き九時帰る。

▼一二月二二日 国元の⁽⁴⁾の件につき、中川兄さん等といろいろ協議する。何しろ当地も近年にない不況、この分では資金の件も何とも仕方ないので、困ったことだ。夜困へも相談に行く。帰つてから小樽へも電話する。

▼一二月二二日

久しぶりで天気快晴、困主人は用向きがあるというので札幌へ行く。⁽⁵⁾の件は若林さんが佐渡へ行かれて相談し、後善後策を講ずることにした。今日は亡き⁽⁶⁾主人の三回忌になるので、妻、支店おつかさん、中川兄さん等が禪源寺へお参りに行く。亡き主人の三回忌も済まないうちに、とんだ空想を夢見て取りの頃、一日に一〇人ぐらいは来

返しのつかぬ失敗をした。これも今になつては仕方ない。今後の処置が第一だ。カレ網漁も一向に振るわないので浜はさびしい。

▼一二月二三日 朝から雪が激しく降る。佐渡の中川さん、今日の富丸で帰られる。遙か遠いところをわざわざ来られた心労、實に感謝に堪えぬ。一般の不況のため思わずい結果を出せずして帰られるのは、誠に氣の毒な次第である。しかし、これで打ち切られたわけではないので、今後、われわれも力を合わせて尽力せねばならぬだろう。私と妻は浜まで見送る。ナギはよいが降雪が甚だしい。

▼一二月二四日

一二月二四日 今日も朝から雪が降り、寒さも厳しくなつた。出面が一人来て、熊さんと屋根の雪下ろしをする。年末になり忙しいことだ。幸治とトミ子は雪の降る中、困る。真っ白になつて帰つて来る。明晩餅つきをやるというので今日は米ときだ。リンゴ買いがこの頃、一日に一〇人ぐらいは来

る。四十九号が一斤四錢だが安いというので売れる。お菓子より割安だから売れていく。浜町田岸へ五〇〇間細アバ繩一〇丸売る。夜、カマボコ焼きをする。吹雪が甚だしい。今年の如き大雪は近年稀だ。屋根の雪で戸や障子がきつい。

▼一二月二五日 朝から雪が降り出して止まぬ。年寄りも、今年程大雪の年はちょっとと経験がないと言う。今日は餅つきをするので、朝から準備、父は三時頃から起きていい。餅つきは伞、田才太郎さん、熊さんだ。六時頃、羽生さんが来て手伝つてくれる。家の軒だけなので八時に終わり、後片付けもすつかり終わつたのは九時ころだつた。これで大仕事も済んだ。店ではリンゴ買いが一〇人からあつた。

▼一二月二六日 久しうりに青空を見せ、近頃にない好天氣。今日から馬車を頼んで、熊さんと出面で雪引きをする。屋根の雪も全部下ろしに。今日は静かな天氣で暖氣だ。今日は馬車屋と出面一人頼んで雪引きだ。これで店の前も広々とした。熊さんは午前中から掛け取りに出かけた。カレ網も思わしい漁がなく景氣も良くない。一般に不景氣のせいか掛け取りも一〇〇円程だつた。この日、亡母の三回忌。禪源寺の和尚さんが来られて読經する。港町の姉もお参りに来る。聞けば今

田先生から塩鮭を買って送つてくれと、はがきが来る。夜、中村床屋で散髪、帰り本に寄り、しばらく話をして一〇時帰る。雪も降らぬ静かな夜だ。中川さん、や。この分だと明日も天氣らしい。今日あたり佐渡に着いたろうか。田先生成る。吹雪が甚だしい。今年の大雪には皆困つてゐるようだ。年末でどこも忙しい。文治はこの頃、力のせいか耳が痛いと言つていたが、今日あたりは少し良いようだ。

▼一二月二七日

今日は静かな天氣で暖氣だ。今日は雪の多いのには驚いた。一二〇三〇年来こんな大雪はないと言つ人もいる。佐賀県にいる広

く。この頃、一日に一〇人ぐらいは来る。四十九号が一斤四錢だが安いというので売れる。お菓子より割安だから売れていく。浜町田岸へ五〇〇間細アバ繩一〇丸売る。夜、カマボコ焼きをする。吹雪が甚だしい。今年の如き大雪は近年稀だ。屋根の雪で戸や障子がきつい。今日は静かな天氣で暖氣だ。今日は馬車屋と出面一人頼んで雪引きだ。これで店の前も広々とした。熊さんは午前中から掛け取りに出かけた。カレ網も思わしい漁がなく景氣も良くない。一般に不景氣のせいか掛け取りも一〇〇円程だつた。この日、亡母の三回忌。禪源寺の和尚さんが来られて読經する。港町の姉もお参りに来る。聞けば今日一時頃、雪で学校の屋根が一部つぶれたとのこと。(続く)

オルガンとわたし

大澤文子

「わたしは新潟生まれの新潟育ちよ」こともなげに言う私に、「ああら道理で時々内地弁がでるわねえ」と友達は言う。

教職についていた父の転勤により、尋常三年生の頃には札幌師範学校付属小学校に転入していたのに……。幼い頃の言葉のアクセントは、自分では分からぬけないのかなア……と思いつ、時折、新潟市を懐かしむこともある。

家はあつた。

新潟市の住宅街の一角に父のいつかその隣に朱い屋根の白い洋館が建ち、パウルスさんというアメリカの若い夫妻が住むようになつた。

春になると洋館の窓は開け放され、そよ風に乗つてブルーのカーテンが揺れていた。パウルスさんの美しい奥さんが弾いているのである。時々、ピアノの美しいメロディが樹立ちを縫つて流れてくる。子供ごころに何か羨ましく、そつと垣根越

しにのぞき、聞き耳をたてることもしばしばだつた。

弟が生まれた時、パウルスさんは、誰にも触らせないレコードがきちんと収められていた。母はうれしそうに大きな箱を開けて見せてくれた。赤ちゃんの帽子が一個入つていた。

ひとつは白い毛糸編みのもの、もうひとつは茶のビロードの帽子だった。茶の帽子の裾は幅広くひだのよう下がり、縁にうさぎの白い毛がついた豪華なものだつた。白い毛糸の帽子はふかふかして手ざわりがよかつた。母は外出の時いつも弟にその帽子をかわるがわるかぶせ、おんぶして縫入れねんねこを着ていた。

私はそのふかふかした帽子に触つてみたくて、「パウルスさん！ パウルスさん」といつも言いながら、何回も飛び上がり赤ちゃんの帽子をなでてみた。「外人さんってお金持ちなんだなア……」と幼心に思つたものだつた。

父は物理学の教師だつたが、何故か音楽が大好き。学校から帰つてくると必ずといついい程、部屋にこもり大盤のクラシックレコードを聴いていた。父の部屋のレコード入れの棚には、誰にも触らせないレコードがきちんと収められていた。父は私たち姉妹にオルガンを買つてくれた。一般家庭にはあまり普及していなかつた大正初期の頃だつた。大分無理をして買つてくれたのであろう。

楽器店から運ばれてきた大きなオルガンは、子供達の勉強机も本棚も隅の方に片付けられ、一番いい場所に運び込まれた。オルガンは足踏みをしなければ音が出ない。つま先を懸命に伸ばしても、まだ幼かつた私には無理だつた。

母の手ほどきは厳しかつた。手で書き、対話も、活字を読むことも減つてゆく前途はやはり何となく気にかかる。

なぜか……足踏みオルガンは、今でもわがあとを追うがに離れる部屋隅に居座つている。しばらく触れてみなかつた鍵盤にこの夜触れてみた。ややうすく黄ばんだ鍵盤は静かに動き出し、「そくらにイさえづる」とりイの声……」、懐かしいメロディが流れ出たのである。だが母はもういない。そして、三尺帯を持って踊るものも

二歳上の姉はさすが先にいい音を出すことができ、羨ましく半泣きになつたが、何日かたちやつと音の出る状態になりうれしかつたのを覚えている。

夕食後、母は弟を寝かしつけるとよく『天然の美』を弾きうたつてくれた。

「そくらにイさえづる」とりイの声……」母の声は細く透きとおりすぎだつた。母がこの歌をうたい出すと幼かつた私は、赤と黄の絞りの三尺帯を簾筒から引つぱり出し、両端を持つと大きく振り回し踊りだした。あとあとまで母によく聞かされたものだつた。

不思議な小川

吉川義雄

自然是、人間生命を優しく育んでくれてはいるが、人間の思ひ上がりにときには牙をむいて警笛もする。

少年の頃、春になればにしんは必ず来るものと、大人も子供たどりに及んで、海流の変化だ、温暖だと、人間の逆らえぬ、自然のせいにすることの何と多いことか。

地球は勝手に温暖にもならないし、急に海流の変化もさせない。そうさせているのは、もしや人間かも知れない。そう気づく人が地球上に多くなれば、自然の優しさも戻ることになるだろう。

古平町に上水道が走り、続いて下水道工事が急速に進んでいくことを知った。

ほんとうにうれしかった。

札幌の豊平川に鮭の遡上が活発になつたのは、上下水道が大部分の住宅に行き渡つたときからと聞く。

少年の頃、それ程汚れない丸山川であつた頃、家の前の流れの中にゴダッペはもちろんのこと、銀燐をひらめかしてウグイの群れが泳いでいたことを思い出す。

今も、きっと川口の海では、遡上を待つ魚の群れがいるに違いない。

にしんの接岸が近い頃、それを知らせるようにハゲ山の急斜面に雪崩が始まる。長い冬の間も雪崩が起きないわけでもないが、春近いときのソレは地肌まで露にするから特別の意味をもつ。

あの急斜面の雪崩の落ち着くあたりが丸山川の源流で、初夏には浅い小沼が出来上がり、その水溜まりも早々に消えて無くなる。丸山川の水が枯渇したことは知らないから、春以降は周囲の地下水を集めて川の体裁を保っているらしい。

しかし、この可憐な小川も、私の少年期には何度も丸山町全域を水浸しにしたことやら、海のまちに住む子供達だから水の上で遊ぶのにコト欠かないが、一夜にして出来上がつたベニスのまちは別格の遊び場。乗つて浮かんでもくれるものなら何でも運び出し、大人達がヤケクソに

なつて叱る声を聞き流して、またとない体験を楽しんだ。

しかし、少々オトナになつて気づいたことが、丸山川の流れの不思議さだった。

ハゲ山から始まつて、急速に深い谷間を抜けるとそこはすぐマチ。琴平神社のあつたあたりを通りそのまま海に向かえばよかつたのにと、小首をかしげた覚えがある。

谷を抜けたとたん流れは九十度方向を変えて新方面に向かう。それもつかの間、またも九度の角度で進路を変更して丸山町に向かつて行く。丸山町に入つてから、この流れはよほど直角に曲がるのが好きらしく、未練そうに生活廐水の中に雑貨を浮かべ、直角を丸めながらようやく海にたどり着く。

なぜこんな流れになつたのか、小川の意志とは思えないが、思えば不思議であつた。

幾重にも川を曲げてまで創つた、丸山の下の海産干場はにじんと共に消滅し、住宅地に変貌している。

何をされても、忍徒の小川は永い間生活廐水を流れ、冬などは便槽から汚物さえ汲み出して流された。

西部地区から町議に立候補する者は、必ず丸山川の改善を頼めた。国からほんの少し力ねが入つたとき、申し訳のように小川のほとりに草花が植えられた。

古平町に上水道が走り、続いて下水道工事が急速に進んでいくことを知つた。

ほんとうにうれしかつた。

札幌の豊平川に鮭の遡上が活発になつたのは、上下水道が大部分の住宅に行き渡つたときからと聞く。

少年の頃、それ程汚れない丸山川であつた頃、家の前の流れの中にゴダッペはもちろんのこと、銀燐をひらめかしてウグイの群れが泳いでいたことを思い出す。

今も、きっと川口の海では、遡上を待つ魚の群れがいるに違いない。

中、
戦、
中、
中、
中、

泣き笑いの
樺太漁場体験記

吉野慶一郎

後、
戦、
後、
戦、
後、
戦、

うということになりました。
歌はうれしい時、悲しい時で
も人の心に響き、聴く人々に樂
しさや元氣を与えてくれるだろ
う。衆議一決、氣心の知れた仲
間によつてすぐに活動が始まら
れたのです。

それぞれが手持ちの楽器や樂

譜、レコードなどを持ち寄り、

な密航に、命がけで祖国へ向か
つた人達の勇気を羨みながら、
その航海の安全無事を祈るばか
りでした。

始まりました。

男性はバンドと歌を、女性は

ドラムは映画館の息子が物置に

あつたのを、オルガンは幼稚園

から借りて来るなどして練習が

歌と踊りを分担しての練習でし

た。歌は各自の得意の曲目を揃

えてログラムを作りましたが、

戦前の人気歌手のいわばものま
ねといつたところでした。

実際の演芸会では、出し物の

ほかに舞台装置や大道具から小

道具、照明などの準備もあり、

仕事の合間に縫つての忙しい毎

日だったようです。

夜間外出の制限があり、練習

時間も確保することもなかなか

難しかったようです。とにかく

猛練習の毎日で、何とか公演へ

こぎつけることが出来ました。

（続く）

素人演芸会 楽団の名前は
大成功！『白樺』とい
う愛称がつけられ、手作りの
『白樺樂團・歌と踊りの夕べ』
というポスターも立派に出来上
り、華々しく映画館で公演した
のは一〇月半ば頃のことでした。
入場料は無料です。

開館と同時に、それを待ちか
ねていたかのように会場は超満
員、中にはソ連兵も混じつてい
ての大盛況でした。

飾られた舞台には久しぶりに
照明も輝き、ここだけはまさに
別天地、雰囲気も満点でした。

バンドマンも白いワイシャツ
に緑色のマフラー姿で、格好だけ
はプロも顔負け、方々から歓
声が上がりました。

開幕と共に始まったのは何と
高らかな『軍艦マーチ』の演奏
でした。これで観客は大いに盛
り上がり、大声援に勢づいてそ
の後は歌・踊り・演奏と、次々
に練習の成果を自信を持って発
表できました。

全く予想外の熱狂ぶりで、会
場はすっかり興奮の渦に巻き込
まれてしまったのです。（続く）

不安のなかで やがて、私の
ソ連軍の進駐 住んでいた樺
太西海岸の野田町にもソ連軍が
進駐して来ました。

思つていたより整然としてい
て、進駐してからも特に大きな
事件などもなく、日本人に対し
ては今まで通りの仕事をし、生
活を続けるようとの通達があ
り、心配していた食糧の配給も
まずは順調に行われました。

しかし、電話やラジオは接收
されてしまつたので情報は全く
伝わらず、また、夜間の外出は
厳しく制限され、不自由な生活
を強いられました。

何よりも先の見えない不安に
おののき、元の町の姿に戻れる
状況ではありませんでした。こ
のような中で密航船の出港が
相繼ぎました。出港しても必ず

母と靈感

富山市 高橋 藤藏
(元・稻倉石鉱業所 勤務)



になりはしないだろうか？

『死？』

いや、危篤の電報ではなかつたし、まさかそんな事はあるまい。でも、万が一という事もあるし。

『やはり死』

『バカな。そんな事はない』

『絶対にない……』

『ない……』

『ある……』

『あら……』

そんな自問自答を繰り返しながら、まんじりともせずに吹雪の朝を迎えた。

早めに出勤した私は、上長に一週間の休暇を願い出た後、仕事の整理に取りかかるうとした

時、またも『死』を連想してしまったのです。

母が私の手を握りながら

『北海道は寒かろう。子供を丈夫に育てるんだヨ』

『入院したのでは』

『若しや危篤なのでは』

と思うようになつた。
持病の高血圧か、悪い風邪でもひいたのかなど簡単に思つていたのですが、念の為に『カエッタホウガヨイカ』と打電したところ

外は、稻倉石に来て以来はじめての超怒級の猛吹雪である。故郷の酒田も吹雪だらうか。

ウーン。歳も歳だし大事な事

つめていたという。

こんな事を考へるなんて何ど

不吉な、と思いながら、フト時計を見た。

八時十五分だった。

取り残した仕事を整理し、身支度もそここに、家族四人が稻倉石を発つたのは、その日の午後だった。

荒れ狂う積丹の怒涛を左に見ながら、バスに揺られ、吹雪舞な小樽に着いたのは、夜の七時頃だった。

駅前の三角市場で、母が大好きな駄菓子と高血压に効くと聞いた海苔昆布を買い、夜行列車に乗り込んだ。

何も知らない五才の長女は「おばあちゃんに会える」と喜びながら、列車の中を駆け

ぎり、荒波の中を驅ける青函連絡船では、横揺れに転びながらハシャギ回っていた。

でも、私と妻は、連絡船の窓を容赦なく叩きつける波しぶき

と、吹雪を見つめ『無事でありますように』

ですが、隣にいた同僚の話によると、この時の私は、視点の定まらないウツロな目で天井を見夜を明かした。

(つづく)

演習は二日間だったような気がする。最終日は染谷大隊長が馬に乗って先頭を歩き、夜通しの行軍であった。

「休憩！」の声がかかる

と、そのまま雪道にスキーをつけたままバタン

と倒れ、グーグー寝てしまう。これ繰り返して朝まで歩く。

夜が明けても体はふらふらで、頭はもうろうとして思考力もなくなってしまう。真昼間でも歩きながら夢を見る。私の前を、ネンネコ姿で子供をおんぶした女の人が歩いている。「へんだな？」なんであたちの隊列の中に地方人の、しかも子供をおんぶした女がいるんだろう？ 注意してよく見ると、それは背嚢を背負った戦友の姿だった。夢と現実との見境いがつかなくなってしまう。

また、居眠りしながら歩いていた

老兵の綴り方

あゝ樺太國境守備隊

橘義春

16

「オーケイ、
オーケイ」と
叫んだ頃は
もう遙か彼
方へ行つて
しまつて
る。

これは真
昼間の出来
事なのであ
る。もし夜
だったら、
間違ひなく
遭難騒ぎに
なるところ
だつたので
ある。

こんな大規模な演習なのに飛
行機も戦車も、大きな山砲も参
加していない。近代戦とは程遠
いものを感じ、何だか戦争ごつ
こでもやつているような気分だ
だろうか？

私は「礼」の号令ですぐ飛び
出せる準備をして、「始めッ」
の号令で頭を上げるやいなや、
まだ心と体の準備のできていな
い相手に向かつて、

「ヤ、ヤ、ヤ、ヤツー」

と大きな奇声を張り上げて突進
し、上胸（胸）を突くという
奇襲戦法で向かつていった。

初年兵が入隊してきたので、
私も二年兵になつた。私たち兵
隊の重要な教練の中に銃剣術が
ある。私は体力がなく、身長も
あまりなく、運動神経も鈍いの
で銃剣術には不利であった。背
の高い者は、上から木銃をさつ
と突き出してくるので非常に有
利である。いつも背の高い者に
負けてみじめな思いをしていた
ので、何とかならないかと考え
出したのが私の戦法である。

銃剣術には基本姿勢と形があ
るが、私はそれを全く無視した
方法でいくことにした。
1. 相手と対戦するときはは礼
をして、「始めッ」という審判
の号令で、やおら木銃を構える
のが普通である。

この型破りの戦法に相手はび

いる丘陵が寝ぼけて、とんでもない方向に歩いて行くと、後ろの丘陵もぞろぞろと金魚のウンコのように、その後について行つてしまつ。誰かがやつと気がついて、これは大変と、ながら兄とは違うことができなかつた。

「状況終わり」のラッパを吹いて私の任務は終わつたが、残念ながら兄とは違うことができなかつた。

ようやく演習も終わり、部隊は汽車で氣屯の連隊へ帰つた。酷寒の地で初めての冬季演習を体験したが、もしソ連軍が実際に攻め込んで来たらどうなるんだろうか？

こんな大規模な演習なのに飛行機も戦車も、大きな山砲も参加していない。近代戦とは程遠いものを感じ、何だか戦争ごっこでもやつているような気分だつた。

ソ連軍を相手にしたとき本当に勝てるのかどうか、心中穏やかではなかつた。

私は「礼」の号令ですぐ飛び出せる準備をして、「始めッ」の号令で頭を上げるやいなや、まだ心と体の準備のできていな相手に向かつて、

「ヤ、ヤ、ヤ、ヤツー」と大きな奇声を張り上げて突進し、上胸（胸）を突くという奇襲戦法で向かつていった。

この型破りの戦法に相手はびっくりして一瞬すきができる、そこがつけ目だ。初対戦の相手程効果がある。審判の「始め」の号令がかかっているのでルーレ違反ではない。（続く）

連作 古平まで

坂本甚衛

(三)

この頃になつて、余市・古平間を往復する度、気になることが一つできた。

私の場合、余市へ出る用事の多くは病院通いや散髪が主であるが、行きはともかく、帰路、白岩町の坂道を下り、海沿いにワッカケ隧道方面へ曲がると必ず目につき気になるのが、恵比寿岩の水際における浸食風景である。

特に走行中の車窓から見る岩が目線に対して直角方向になつたとき、眺める岩塊の根元のか細さがたまらない。まるで徳利を逆さに立てたのと同様ではないか。

元来ここらはワッカケ崎シリバ裏に取り囲まれた湾の中にある。激しい風浪は直接当たらなくなつていて、さらに浪に削られて当節の形に変化し

恵比寿・大黒岩のある地点は磯から突き出た岩礁の上にあり、ふだん目にする波は小波程度である。にもかかわらず幾百年という歳月と、時たまやつてくる波浪が岩塊の根元を削り、現在のようにいまにもボツキリ折れそうな不確かな形に変えてしまったのだろう。

昔から恵比寿岩・大黒岩。またはめおと岩とも呼ばれ広く世に知れ渡ってきた二つの岩だが、二つ揃っているから珍しいのであって、恵比寿岩が倒れ大黒岩一つになつてしまつては何の変哲もない、と言えば悪いが、明らかに昨今より風光を欠くのでは、とお節介にも私はいらぬ気を病むわけだ。

遠い昔、どのようにしてこうした岩が出来上がり、幾多の激浪に削られて当節の形に変化し

たかは知らない。しかし、いかなる巨人が手を加えたわけではもちろんなく、すべては大自然のなせる美の産物にほかならぬのだ。

もともと積丹半島の地質は、二万年前とも、五万年前とも言われる海底火山の爆発によつて隆起した水冷破碎岩で出来てゐる。その海岸線の多くは、火山灰が固く結びついた岩の中に大小の小石を含んだ堆積岩である。

かつて私らはその岩を見たときのイメージどおりに、礫混じり集灰岩と呼んだものだが、積丹半島中心部に層をなす他の岩石などと比べると極めて風化しやすく、もろい性質がある。だからといって、ここ二、三年の間に岩塊の持つ持続性が終わり度合いが進んだことを意味する。恐るべき進行速度である。

現在の形にまで風化、浸食の悠久に比較すれば、二十年に満たない月日など瞬きにも似た時間でしかないだろう。その一瞬の歳月も自然意志ともそれ濡汰は止むことなく岩塊の集灰岩質を風化させ、イボ状の礫岩だけが残る現在の倒壊寸前まで追い込んだ、と推察できる。

うが、私が撮つたものを引き伸ばしたものである。

背景のシリバ岬岸壁に当たる弱光が朱く染まりだした頃だから、午後遅くだつたろう。その写真にある恵比寿岩の水際は、昨今よりも確かに少し太く、凝然とたたずんでいる。並び立つている大黒岩のてつべんにまだ鳥居がない時代である。

いつたいいつ頃写したのかと、古いアルバムを引っ張り出し半日かけて調べてみた。

「昭和六十二年三月一日撮影」

とあつた。ということは僅か十七、八年の間にじよじよに現れる形にまで風化、浸食の度合いが進んだことを意味する。恐るべき進行速度である。 気の遠くなるような天地の

俳句鑑賞

お楽しみコーナー

11

句碑二題

俳誌 悅主宰 水見壽男

古平町史編纂室のまとめた『故郷の石碑散策』は労作であります。詩碑・句碑・歌碑は言うに及ばず、数々の記念碑・墓碑に至る三十七基余をまとめて、その概要を余すところなく伝えてあります。そ

の中から特にホトトギスと縁の深い一人の俳人、泊月・素十の句碑について繙いてみましよう。
まず、野村泊月です。古平町禅源寺境内に

蝦夷の古都古平濱の盆の月 泊月

書はやや筆太の雄渾な筆致で、昭和五年、泊月が古平へ来遊した折の作品ですが、すでにこの頃泊月は眼を悪い、殆ど失明状態の様子でした。ですから、太い筆致でしか運筆できなかつたのです。そんなことから極端に揮毫を避けていたと伝えられています。余程の思いを古平に感じ、特別の趣きのままに揮毫したものと察せられます。昭和五十五年、甥の西山小鼓子（ホトトギス同人 西山酒造社主）に、古平の句碑のことを話したら大変喜んでおられました。

泊月の眼を思う前の句の短冊を見せてもらつた

ことがあります。万葉調の細い筆致で流れるような筆の運びです。句は京都の天神社を写生したもので大変珍しい内容です。

屋根替えて藁天神や花曇り 泊月
よく読み下すと、季題が一つ入っているのがわかります。屋根替えは春二月の季題であり、花曇りは春四月の季題です。上五・下五に季題を二つ重ねて天神様の在り所を確と据えている感じの句柄です。

私も五年程前、京都へ行つた際、句作りのモデル天神様を訪ねてみました。大変趣と雰囲気のある歴史をきざむ天神様でした。俳句の基から言えば季重と思われますが、季節の主役は花曇り、屋根替は脇役と位置づけて鑑賞する

と成る程と諾われます。
野村泊月は兵庫県の人。兄泊雲も俳人、虚子門で大正後期から昭和にかけてホトトギス誌上で活躍しました。西山泊雲は酒造業を経営し、その息子が小鼓子。西山酒造では銘酒を醸造していますが、その一つに虚子命名の『小鼓』があり、それが小鼓子の俳号の由来です。

例えは今まで何も無かつた空き地に家が一軒建つたとする
と、いつも眺めていた光景が遮られ、全く別の風景に変わった事態となる。初めのうちはなにかそぐわない違和感をもつて見ていた景色も、やがては次第に氣にならなくなり、最後には以前からそこにあつたような気がしてくる。かつて大黒岩のてっぺんに鳥居を建てた寄進者がいて、通る度、何でわざわざご苦労にも、と思った。そのうち通行人の目にもいつしか馴染み、今ではなくてはならぬ点景と化した感がある。

近い将来において、『ころりと横倒しになつた恵比寿岩の無残が、通る人々の慣例に従い違和感なく見られる日が、果たしてくるであろうか。





古平町岬短歌会



古平俳句会

たびたびのお声がけの有り難く暖かき答とはげまされをり

奥 山 きよみ

町中に亡き子と思ふ若者を見守りて佇つにふいに振り向く

鈴木 時子

町内の人らの寄りし新年会腹から笑ひ樂しひとき

月影を背負ひて歩む吾が影は雪路の上に孤独とも見ゆ

田中 香苗

病院の窓より初日とどき来て退院近きを拝む幸せ

堀 内コト

この海を喜びし日のとおき妻息絶えて帰る潮の香の中

寺内りよう

息子の家に年を迎へぬ早く起き若水汲むと蛇口に礼す

竹内コト

線香花火の赤き火玉の如く見ゆ六万年ぶりに近づく火星

池田テル

戦なき平和の日々を願ひゐしにイラクに発つよ自衛隊員
任務終へ元気にお帰り下されとただ祈るのみ朝に夕べに

東美知

お詫びして訂正いたします
④(正) 石倉を這ふ鳶もみぢ水に映る運河べりゆく足を止めつつ
石倉を這ふ鳶もみぢ 映る運河べりゆく足を止めつつ

池田テル

群青の波頭凍て日本海

越野清治

(モトギスコム)

雪原の果ては積丹日本海 斎藤波留
吹雪去り沈黙の街動きけり 山口悦子

荒海や飛翔のかもめ冬ざるる 越野敏雄
初嵐や波の響きの良き音かな 大和田絵伊

食べしもの皆美しき初明り 福井幸平
岩風呂や湯氣の向ふは雪屏風

高橋重子 大仲谷比呂古

船頭の鉢巻重し冬の海 仲谷比呂古

年瀬やうねりの中を出漁す 室谷弘子

外山俊久

大地より空に巻き上げ北の雪 渡辺嘉之

堀典子

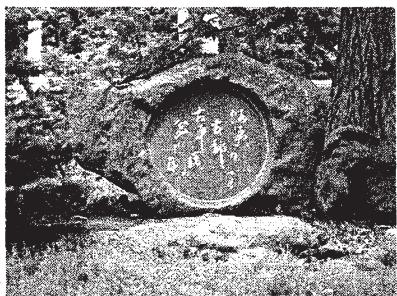
一条の光放さる冬の海

初耀に紅白の幕張られあり

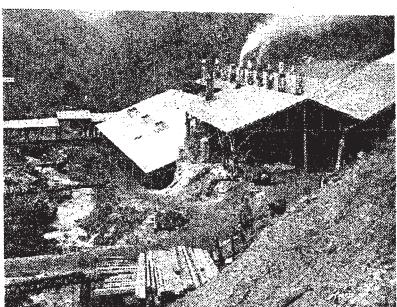
古平町史年表

昭和5年(1931) ~ 続き

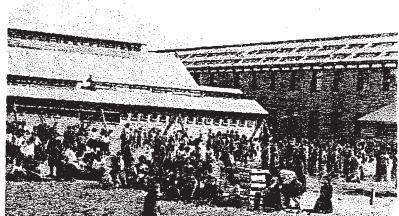
- ▲古平水難救済所が帝国水難救済会総裁から表彰される
 - ▲ホトトギス同人の斎藤雨意が来町する
 - ▲同上野村泊月が来町する（後に禅源寺境内に句碑を建立）
 - ▲古平信用組合が無限責任大典記念古平信用利用組合に改組
 - ▲豪雨のため古平川が氾濫し各所で決壩、泥の木橋も流失し、鴨居木分教場付近一帯の耕地が泥沼と化した
 - ▲稲倉石鉱山が万盛坑の主脈となる大鉱床を発見する
 - ▲古平尋常高等小学校が鰐不漁のため延期していた運動会を校庭で行う（現在の文化会館は古平小学校跡地）
 - ▲沢江村の西村方から出火したが、付近住民の手により直ちに鎮火した
 - ▲道主催の道産米產出 300 万石記念祝賀会が開かれ、泥の木 大橋嘉助に道府長官から記念品が贈られる
 - ▲僭釣り漁船 2 隻が遭難し、10 人が行方不明となる
 - ▲トラホーム患者が 20% となり、道から医師が派遣される
 - ▲陪審裁判所制度に伴い町から 10 人の陪審員が選任される
 - ▲役場正面玄関の鬼門を避けるとして現在位置に移設する
 - ▲古平信用利用組合が 10 カ年計画の一環として発動機船を建造し組合員に貸与することを決める
 - ▲念願であった古平漁港船入瀬建設工事が始まる
 - ▲スケソウ漁業に 43 隻が着業し、漁獲高も 20 万円を超えて町の主要産業となる



禅源寺参道脇の野村泊日向碑



稻倉石鉱山の初期の焙燒炉 (ばいしょうろ=マンガンを焼いて不純物を取り除く)



旧古平小学校の校庭 (現在の古平町文化会館)

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

七
卷之三

「古平いろはうた」で紹介した文
学碑・吉田一穂『魚歌』の冒頭の俳
句が落ちていました。一穂先生に
怒鳴られるところでした。

先月号は大変なミスが多く
お詫びして訂正いたします。

海道拓殖銀行美國支店が古平支店に合併される」とあります。が、信金の越中理事長さんから「これは旧北海道銀行ではないか」との指摘があり、調べて見ましたら「北海道銀行(旧)で昭和6年」でしたので、この項目を削除します。ありがとうございます。

【泣き笑いの樺太漁場体験記】の筆者である吉野慶一郎さんのお名前がありません。大変失礼をいたしました。

【年表で読む古平の歴史】古平の
鮭漁・2段目の空欄「」れば、中国
人が鮭の仲間である を干したメ
ンタイ(明太)…」の空欄には「鮭
という字が入るのでですがワープロに
その字が無く、パソコンからの入力
を落としていました。
【短歌欄】池田テルさんの一首を
訂正いたします。